

出土土師皿編年試案

横 田 洋 三

1. 文献に見られる土師皿

土師皿（かはらけ）に関しては、13世紀末の『厨事類記』、16世紀前半の『宗五大艸紙』に配膳の様子をもって書かれている。また、応永二十七年（1320）『海人藻芥』に「^{ヤカヅキ}鍾ハヘイカウ二度入三度入置也然ニ近代⁷¹問物五度入塞鼻如レ此種々土器令ニ出来ニ酒興盛故也」とあり、このころより土師皿の種類がふえてきたことを示している。18世紀には『貞丈雑記膳部之部』において、当時の状況をあわせ、中世土師皿の考察がなされている。

貞丈雑記巻之七膳部之部（抜粹）

- 一、^{カハラケ}土器品々の事小きをこちうへそかわらけの事也小ちうより大なるを三ど入と云三ど入より大なるを大ちうと云小ちうに對したる名也さて又三ど入より大ちう以下三まはりづゝ大も大ちうに三まはり大なるを五ど入と云五ど入より三まはり大なるを七ど入と云それより九度入十一度入十三ど入十五ど入まで何れも三廻りづゝ大も十五度入より上に大なるはなし五ど入七ど入より上段々大なるは酒もりの時肴をもりて出す時用る也舊記にかかわらけ物と有は此事也前に云へそかわらけの事を小ちうと云は三度入の内に重る小き土器なる故なり三度入は盃に用るかはらけ也酒は盃に三度づゝ入る故盃になる土器を三度入と云大ちうは三度入の外に重なり大なる故大重と云五ど入は三ど入よりは大成故五ど入と云七ど入と云も九度入以下も同じ事也三ど入五ど入は五はい入三はい入と云事にはあらず段々に大きくなるゆへ三度入と云に本づきて名付たる名なり

【頭書】 條々聞書云三ごんの図に小ちうへそかわらけ共云又膳部の図にてしは皿と云は小ちうの事也○貞丈云武家ニテハ二度入ヲ忌也凶事ニニツ盃ニ二度ツツ酒ヲ入故ナリ

- 一、そくびと云かはらけ有式膳部記に大ちうにもる但そくびと云かはらけ可然云々貞衡云そくびと云かはらけ有大サはいぼうろく程あり（灰ほうろく茶の湯に用）肴などもりて出す也
- 一、あいの物と云かはらけあり大草殿相伝書に云あいの物とは三ど入より少ほそく平かうよりふとし（ほそしとは小さきなりふとしとは大きな也）
- 一、へいかうと云かはらけ有風呂記に云御通りの（貴人の御前へ召御酒被下をいふ）盃は⁷⁴平高也北上記云へいかうと云ほそきかはらけ云々あいの物よりは小きかはらけ也ふかきかはらけ也條々聞書云手かけのこしらへ様を記して平幸にしたばりをしてけづり物をまんちうのなりにつむべしと有へいかうはつぽふかきかはらけ故それを下張をしてうつむけて其上に五色の魚類を削りてもりかくればまんちうの形に高く成也神に供物をもりて奉るかはらけに平賀（本字ハ平狹ト書ク）小壺と云あり平賀は○如此小壺は○如此手壺は○如此（此図ハ神道類聚名目抄ニアリ）此手壺といふ物へいこうなるべし平高と書けども⁷⁵平壺なるべし小壺の如くふかけれども強く深からずして平き故平壺と云なるべし

一、白かはらけと云は白く焼たる也今も京の深草焼土佐の尾土焼などはごふんをぬりたる如く白きかわらけなり

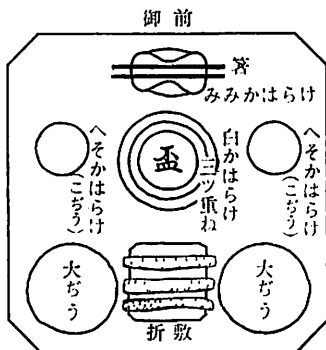
ここで述べられている土師皿の種類をあげてみると左下の表のようになる。

こちう……………	へそかはらけ
二度入……………	小さい土師皿
三度入……………	一般的な土師皿
大ちう……………	五度入以上
そくび……………	ほうらくぐらいの大きなもの
へいかう……………	碗のように深い皿
白かはらけ…	白い土師皿
あいのもの…	三度入より小さい

実際の発掘において検出される土師皿を左記のものと照らし合わせるには、かなりの無理が生じる。一応「三度入」が一般に多く使用されていたと想定できる。これを検出量の多い口径12cm前後の土師皿とした場合、五度入は18cm近いものとなり、検出例は、きわめて少ないものとなる。二度入は同じく9cm前後となり、『海人藻芥』以前は、二度入れも多用されていたと考えられるところから、褐色系小皿と想定できる。

「へそかはらけ（又は小ちう）」、「白かはらけ」は、『宗五大艸紙』（室町後期）でふれており、描かれている様子から、B₁タイプ碗、へそ皿と考えられるのであるが、時期的相違が大きく、疑問を残すところである。また「へいかう」が、B₁タイプ碗と形が似ているのであるが、大きさが合わない。なお『厨事類記』、『海人藻芥』には、白かはらけについてはふれていないが『貞丈雑記』に白かはらけは京の深草焼となっており、『厨事類記』には、「深草土器」という記述が見られ、これが、白かはらけに相当する可能性はある。

・配膳例



付第1図 配膳例（宗五大艸紙）

『宗五大艸紙』に載っている配膳の一例を挙げてみる。膳の両脇にへそかはらけが置かれ、塩、酢などの調味類が入れられている。大ちうには梅干し、くらげ、鯉のうちみ等となっており、三度入には汁ものが入れられたりしている。左図は武家における膳の様子であり、いくつも運ばれてくる膳の第一膳にあたるものであり第三膳までとなっている。第一膳には白かはらけが取り皿として三枚重ねて置かれている。かはらけ以外には折敷^{おりじき}が多く使われている。ここでは陶磁類はあまり見あたらない。

2. 土師皿の分類

土師皿は『海人藻芥』ににあるように、15世紀以前はそれほど多くの種類をもたなかったとする。また、二度入、三度入等のように、口径を基準に作られていたものと、へいかう、へそかはらけ等、形そのものを基準として作られていたものがあると想定できる。

土師皿を分類するにあたっては、これらを考えた上で行なってみた。

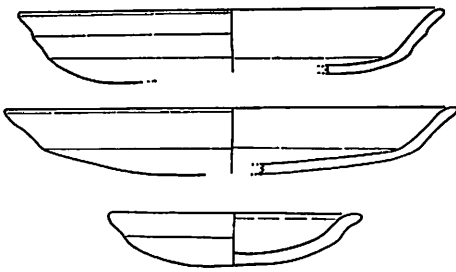
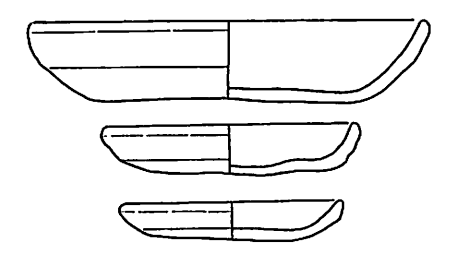
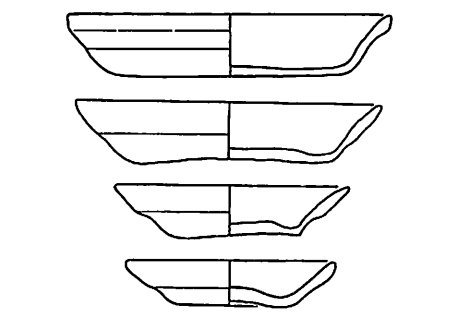
検出した土師皿は、使用する土により、褐色系（Aタイプ系、Cタイプ系）と白色系（Bタイプ系）の2種に大別でき、成形上においても、手びねりで作られているもの（Aタイプ、Cタイプ系）、型を使用しているもの（Bタイプ系）に分けることができる。

表面の調整は、全種ほぼ同じ技法がとられ、内底面が一方向ナデ、内面口縁、外面口縁上部が横ナデ、外口縁下部、外底面が未調整、というのが一般的である。

編年するにあたって、当面の目的は正確な実年代を知ることにあるが、供出する遺物、遺構の文献等による比定が困難であり、他遺跡の例との比較によってのみの時代判定にとどまった。一応、I期を11世紀、II期を12世紀、後各々約100年ごとと想定してみた。

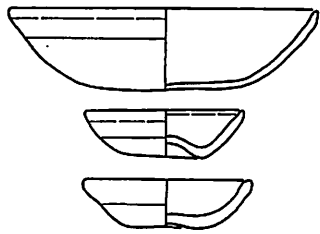
褐色系（A₁・A₂・A₃タイプ）

一般に粘土は多少の鉄分を含み、低温による酸化焼成においては、茶褐色、又は赤褐色になる。採掘は容易であったと思われ、従来より多用されてきたものである。土師皿においても例外ではなく、質的に多少の差こそあれ、普遍的に使用されている。

A ₁ タイプ		<p>成形法 口縁部を指でつまみ上げ、横ナデを入れる。</p> <p>備考 一般には端部に近づくほど、器壁が薄くなり、端部は一様に外反している。</p>
A ₂ タイプ		<p>成形法 小型器は口縁部を横ナデにより引きおこしている。大型器の横ナデは内傾する。</p> <p>備考 一様に広く平らな底部を持つ。口縁端部が三角、又は四角くなっている。</p>
A ₃ タイプ		<p>成形法 立ち上り部に角がつくように口縁部をつまみ上げる。</p> <p>備考 一般に大型、中型器は内面立ち上り部に指による強い圧痕、外面底部に板目状の圧痕を残す。小型器はそれに準じない。</p>

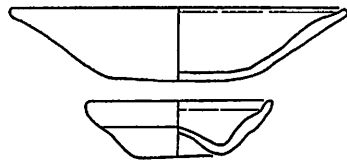
白色系白色土 (B₁タイプ)

白色土は、鉄分の含有量が少なく、精良なものであり、焼成後、軽く仕上る。この土が使用される器種は少なく、土師皿においては一部一時期使用されたにすぎない。

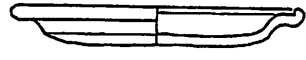
B ₁ タイプ		<p>成形法</p> <p>型押しによる成形法が考えられる。</p> <p>備考</p> <p>碗タイプの体部は内湾している。器壁は薄くていねいに仕上げられている。へそ皿は突出が浅く底部全体をへこますものが多い。</p>
-----------------------	---	--

白色系亜白色土 (B₂タイプ)

白色土が灰白色～白色を示すのに対して、亜白色土は赤白色～黄白色を示し、わずかに質的な劣りを感じる土を使用する土師皿である。

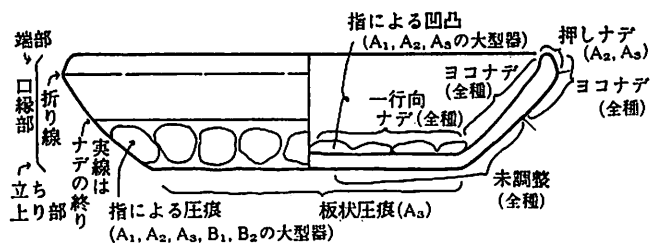
B ₂ タイプ		<p>成形法</p> <p>B₁タイプと同様と思われる。</p> <p>備考</p> <p>口縁部は外反する。口縁端部に突帯状のわずかな折り返しがあるものもある。へそ皿は突出が小さく鋭い。突出部内部にツメ跡を残す。</p>
-----------------------	--	--

別系統

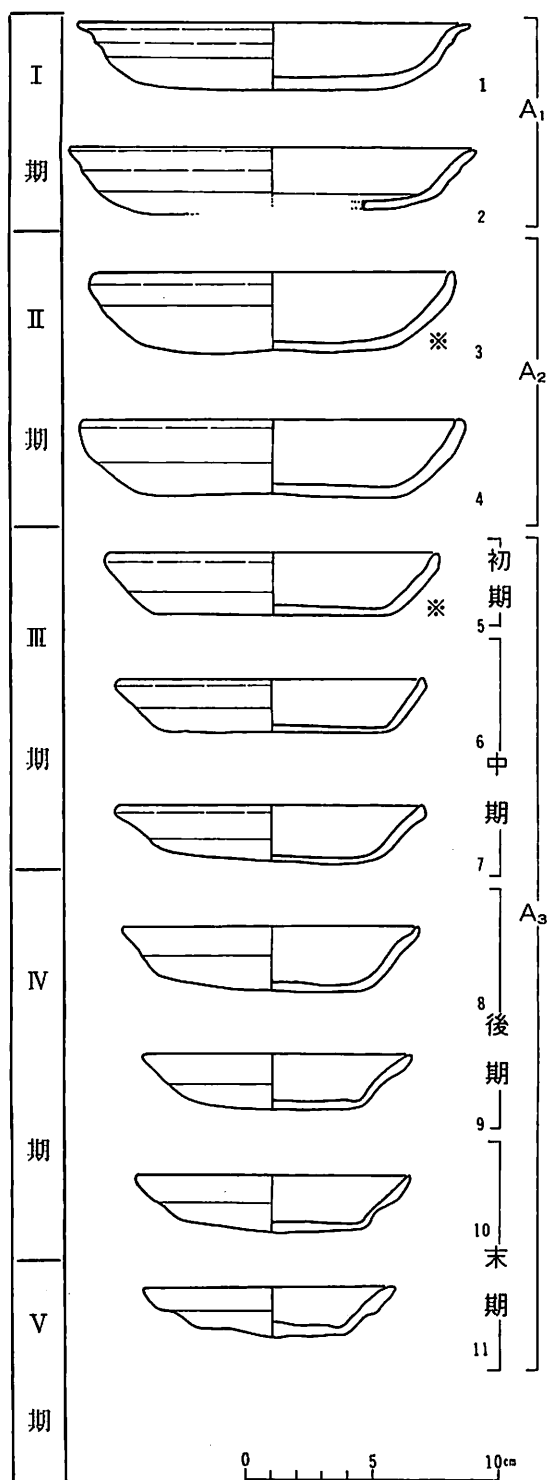
C タイプ		<p>成形法</p> <p>口縁部を強く横ナデし、外反させ、端部を内に折り返すことにより肥厚させる。</p>
----------	---	---

他に口縁部を内に折り込むものをDタイプとする。出土数が少ないため参考にとどめる。

各部の成形・調整法は、右図に従っている。



付第2図 土師皿成形・調整



付第3図 褐色系土師皿（大・中皿）系譜
（※は遺構外選出品）

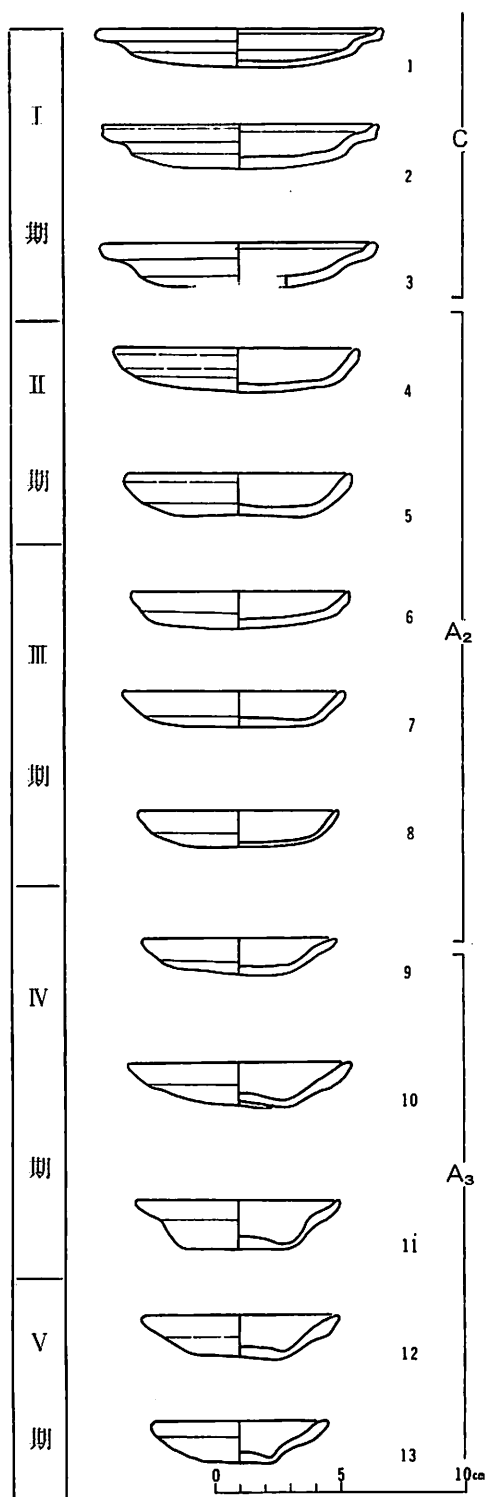
3. 土師皿の編年

褐色系大(中)皿（付第3図）

I 期における土師皿は、口縁端部が外反するA₁タイプである。口縁外面に2段の横ナデを施すものが多いが、規格性は少なく、成形上多くの手法が見られる。胎土は均一性が少なく、灰褐色～赤褐色を呈す。きめは細かいものも多く、砂粒などはあまり多く含まない。口径は15cm前後とかなり大型である。

II期では、口縁端部が内傾するA₂タイプとなる。A₁タイプとの共存期間は認められていない。成形上では立ち上りがゆるく、その内面には指による軽い凹凸が残っている等、似たところもあるがA₂タイプにおいては規格の一定性、底部の平面性および肉厚の一定しているところなど成形上かなり大きな変化があったと考えられ、単に口縁端部の処理の違いだけではないと思われる。前半は口縁外面に2段の横ナデが施され、後半には上部の横ナデが端部のみを上から押すようなナデになる。このナデはA₃タイプにも引きつがれる。胎土は茶褐色を呈し、きめは細かくやや軟質である。均一性があり、A₂タイプ大皿はほぼ同じ土を使用し、生産地の限定できるものと考えられる。

III期ではA₃タイプとなる。立ち上り部が角を持つようになり、その内面には指による凹凸がかなり強く残るものが多い。前半は口径が大きく(14cm前後)胎土はA₂タイプと共通している。これをA₃タイプ初期型とする。後半には口径が12cm前後と小さくなる。このあたりから土師皿の小型化が行なわれ、以後しばらく



付第4図 褐色系土師皿（小皿）系譜

大型のものは見られない。この中皿を A_3 タイプ中期型とする。中期型は口径12cm前後、器高2cm程度であり A_3 初期型に比べてかなり小さく見える。口縁は素直に立ち上り端部には内傾する押しナデが入り初期型と作りを同じくしている。胎土は A_2 タイプのものと異なり赤褐色～灰褐色を呈し、砂粒を多少含みやや硬質である。

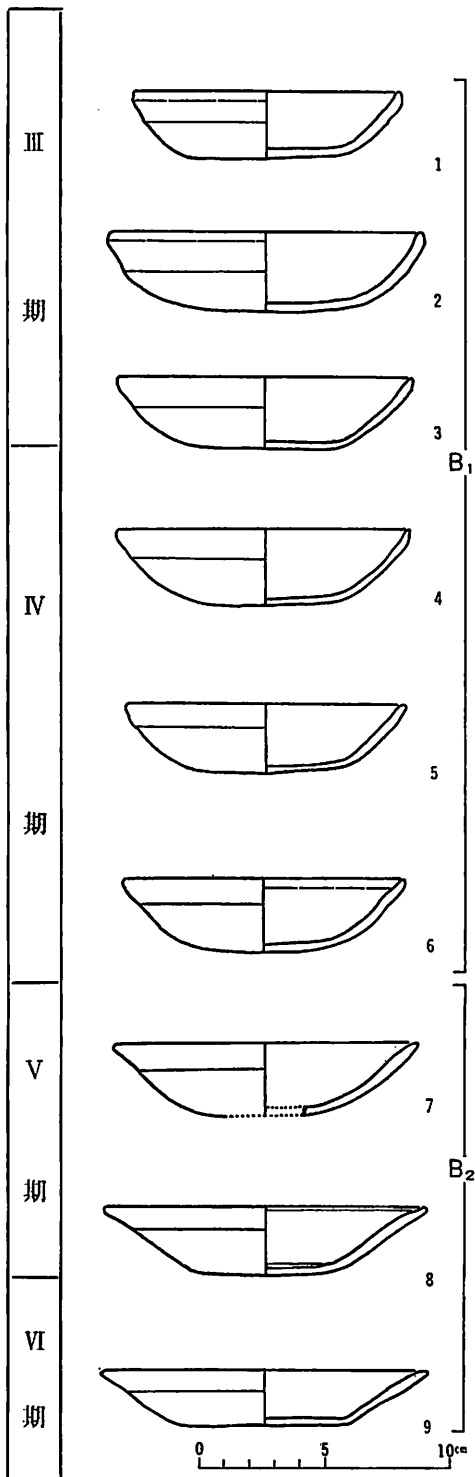
IV期には口縁断面が「S」字型を示すようになり、端部の押しナデはほとんど見られなくなる。これを後期型とする。後半には粗雑化が進み、立ち上り部の器壁は指による強いつまみ上げのため薄くなり、口縁部が肥厚してくる。これを末期型とする。

V期には口径が10cmをこえるものはほとんどなくなっている。粗雑化はさらに進み、底部の凹凸も激しい。

褐色系小皿（付第4図）

I期における小皿はCタイプがほとんどでありわずかに A_1 タイプが供出している。Cタイプは大皿があることが知られているが、I期では見られない。前半では器壁が薄く、作りはいいであるが後半においては器壁が肥厚し、口縁におけるCタイプの特徴も薄れつつある。胎土は均一性を示さず赤褐色～灰褐色を呈する。砂粒分はあまり多くない。

II期においては、大皿同様 A_2 タイプへと移行している。 A_2 タイプがCタイプ、 A_1 タイプいずれの器型からの変化が明らかでなく、これも大皿同様、大幅に成形上の変化があったと考えられる。初期には口縁外面に2段の横ナデが施されており、後期には1段となる（4・5）。II期における A_2 タイプは端部に押しナデが入っている。胎土は A_2 タイプ大皿に共通する。



付第5図 白色系土師皿(埴・中皿)系譜

III期においては、大皿はA₃タイプに移行しているのであるが、小皿は依然A₂タイプである。しかし、端部の押しナデはほとんど見られなくなっており、胎土も赤褐色～灰褐色を呈し砂粒の多いものになっている。

IV期においてA₂タイプからA₃タイプに移行している。その変化状況は9によく表れており、土壌Cの遺物を参照してもらいたい。A₂タイプ、中間タイプ、A₃タイプの混合が見られる。A₃タイプは、成形上の粗雑化、簡素化から作られた形と見ることも出来、一般に歪みが大きく、粗雑である。内面立ち上り部には強い横ナデが入り、口縁部の引き起し方が大型器と異なっている。胎土は赤褐色～灰褐色を呈し、砂粒の多い、質の悪いものが多い。

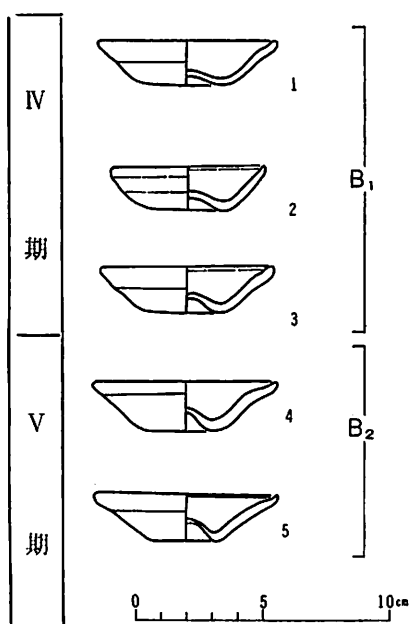
V期・VI期を通じて、変化は少なく、大(中)型器が消滅した後も存続している。

褐色系小皿は灯明痕を持つ物が多いが、用途ははっきりせず、へそ皿との使いわけも明らかでない。

白色系土師皿 (付第5図)

白色系の土師皿は、**I期**、**II期**には見られない。**III期**において碗様の形で出現している。初期型はA₂タイプに類似している。1は口径が小さいが2（墓A出土）は口径12.5cmとやや大ぶりでこの口径を示すものが多い。口縁部の巻き込みは比較的きつく、端部に軽い折り線が入る。底面積は広い。

IV期はヘソ皿を共出する時期であるが、4～6にかけ壠タイプの変化はほとんど見られない。この白色系土師皿は、型を使用する成形法が考えられ、規格性に富むものであり、同遺構における個々の違いは口縁端部にわずかに表われるだけである。また外面横ナデ下部に指によ



付第6図 白色系土師皿(へそ皿)系譜

る軽い圧痕を残す。対する内面には凹凸は無く、Aタイプ系と異なるところである。また器壁が非常に薄いものも検出されているが、この器厚の時代的变化は明確でない。IV期後半には口縁端部が素直に終わり、折り線などは、入らなくなっている。

V期は亜白色土を使用するB₂タイプとなる。これはB₁タイプの白色土に比べわずかに赤味を帯び、重質でやや砂っぽい。器型は口縁部が外に開くようになってくる。開く角度は徐々に広くなり器高が低くなる。またB₂タイプでは8に見られるように口縁端部上方に、わずかな突帯を作るものがあり、量的にはかなりの数を占める。このB₂タイプは後にも長く継続しており、口縁断面を菱形に、内面立ち上り部に強いナゲ溝を持つ器型へと変化してゆく。胎土はしだいに褐色化している。

前にも述べたように、『宗五大帥紙(條々聞書)』に出てくる「白かはらけ」(3重の大きさがあり、重ねられている)が白色系B₁タイプ、B₂タイプに相当するものとするのは時期的に疑問である。また『貞丈雑記』に江戸時代においても、京都深草において白かはらけを生産している、となっているが、B₁タイプ(鎌倉)、B₂タイプ(室町)が同じく深草あたりで生産されていたとするのは早計であろうか。なお、9は京都幡枝の産と思われる。

白色系土師皿(へそ皿)(付第6図)

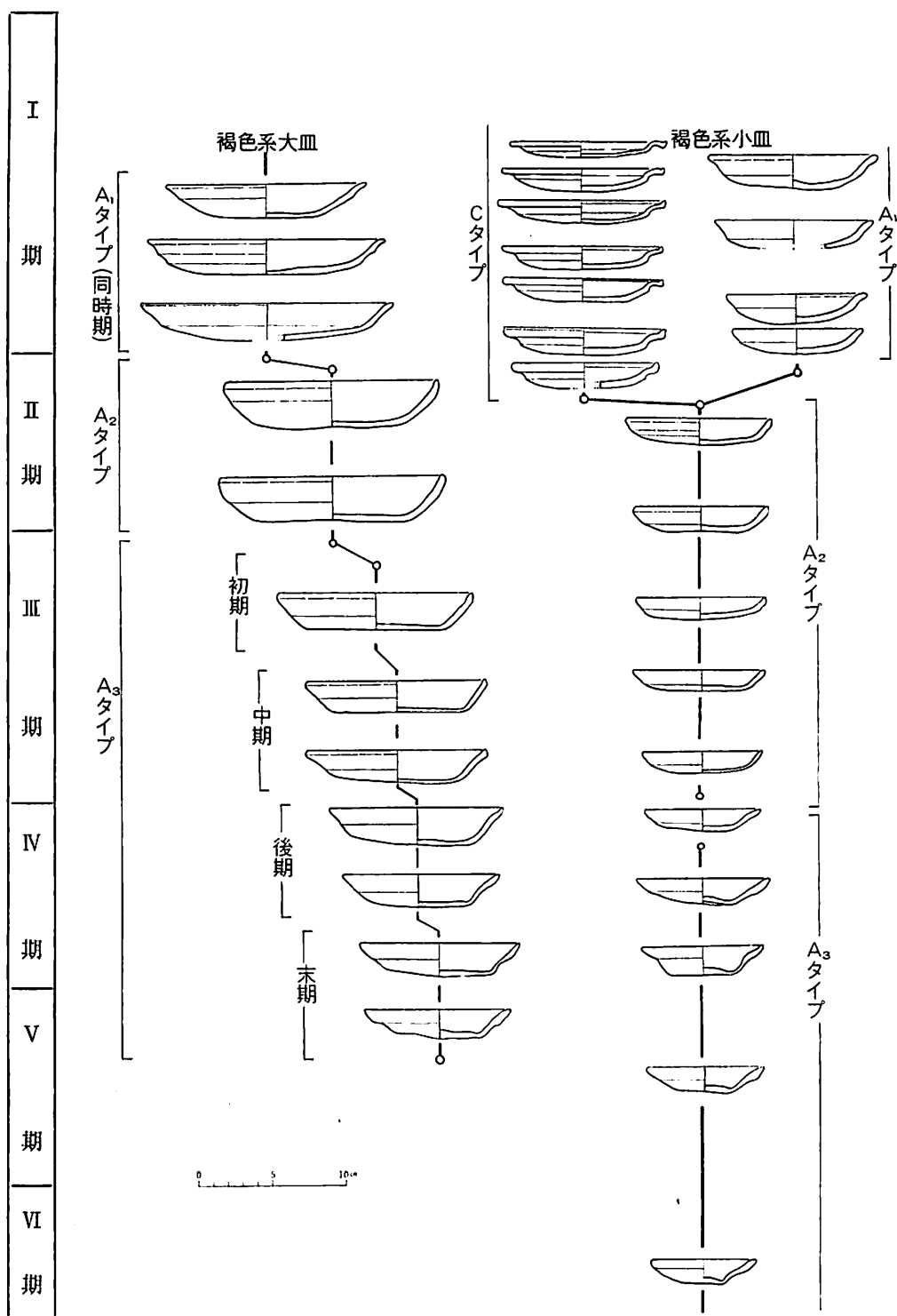
へそ皿の出現期間はIV期、V期のみである。

IV期、白色土を使用するB₁タイプのへそ皿である。初期型が明らかでないが、白色系B₁タイプ小皿からの変態ととることが出来る。1は口径が大きく突出が浅く、これを初期型と想定したが、2のように体部の巻き込みがきつくなき、3に通じるところもある。2は、端部の折りがかなりきつく入っているがこれは2を出土した遺構(土壌C)の約半数を占めている。3ではかなり突出がきついものが多くなり、体部は「S」字を描くようになる。

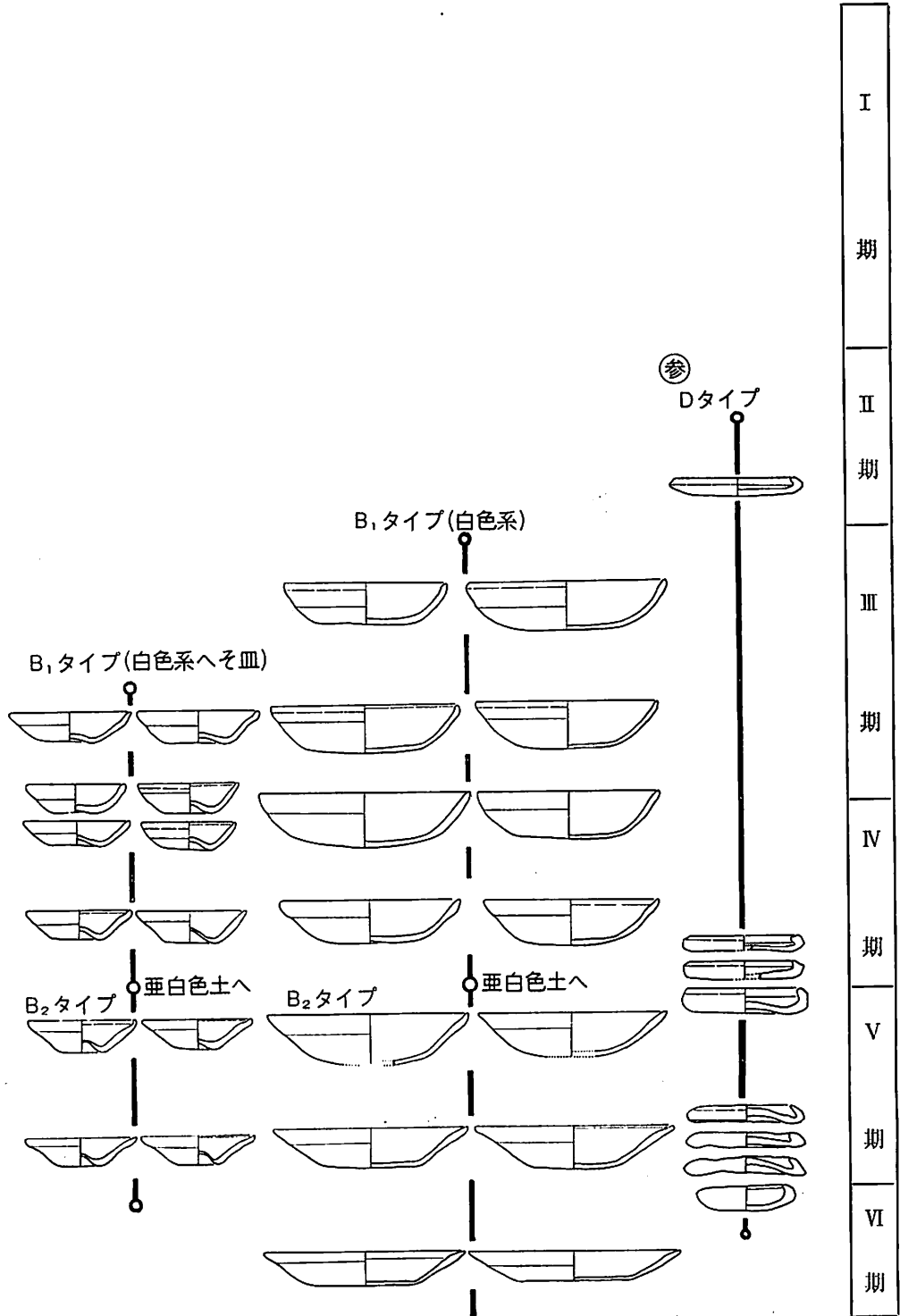
V期では亜色白土B₂タイプとなる。突出部の様子はB₁タイプと著しく異なり、小さく鋭く、内部にツメ跡を残している。また中皿同様、口縁端部に突帯様のものがつくものも多い(5)。これは、2の折りとは、様子の違うものである。

へそ皿は、同系列と考えられるB₁タイプ碗、B₂タイプ皿に比べ、規格の一定性ではやや劣るものであり、口径、へその作りなどかなりのばらつきが見られる。

本章をまとめるにあたって、平安博物館助手、川西宏幸氏に多くの御教示を賜わった。末筆ながら謝意を表する次第である。



出土土師皿編年表 1



出土土師皿編年表 2